



祖父が入門後押し (中)

赤川・内川は暴れ川 果物に活路求めた

今年も熊本をはじめ全国各地が水害に襲われている。自然の脅威をあらためて感じるが、赤川もかつては暴れ川で知られ、鶴岡市街地をゆったり流れる支流の内川もよく氾濫した。鶴岡紹介のイメージビデオにもよく現れる三雪橋が大正10(1921)年の大洪水では、すぐ下流の千歳橋もろとも一緒に流された記録がある。今は上流のダム建設で治水が成ったが、昭和62(1987)年にも洪水があった。柏戸の実家がある旧櫛引町桂荒俣字下桂はまさしく内川沿いの集落で旧字名は「下川原」といった。まさしく川原沿いの土地だった。



こうした流域は長い年月を経て砂利質の土地になる。そのため農家は作物を思案する。透水性の強い土地だけに粘土質が有利な稲作に關しては、他地域に比べ収穫率が低い。そのため果物に活路を見いだした。これが「フルーツタウン」くしび

入門直後の柏戸。着物姿で頭はいがぐりだ

き」の起源でもある。富樫家でも剛の祖父・蔵人は米を娘夫婦に任せ、さくらんぼ、和・洋梨、りんごなどを育てた。これをリヤカーに載せて鶴岡まで行商に行く。曲がりくねった部分も多かった国道112号線の砂利道だったが、中学生時代の剛が朝方文句も言わず、片道7、8キロの道を一緒にリヤカーを引っ張ってくれた。

鶴岡を1日2往復

剛は卸し先の鶴岡銀座の青果店に着くと、いったん

来た道を徒歩で戻る。そして夕方、祖父を迎えに再度鶴岡に向かう。今度は自転車だ。行商を終えた蔵人は市内養海塚(現千石町)の親戚宅で一休み中。帰りは空になったリヤカーの中央に座らせ、自転車とリヤカーを連結させ、自転車を漕ぎながら山添に帰宅した。櫛引中3年生の秋は日曜日だけでなく、平日にも手伝った。

我慢強さ頼もしく

高1になった昭和29年秋、体験入門した剛が東京から戻ってこないことに母かつるは心配ばかり口にしたが、蔵人は自らが交わした

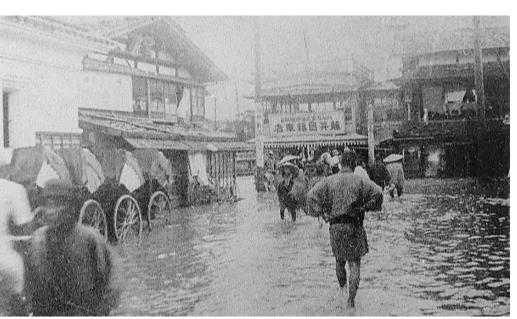
た会話を思い出し「剛は意気地があるぞ。結構やれるぞ」と前向きに捉えていた。おとなしい性格が相撲に向いているかは別にして、我慢強い面を頼もしく感じていたのだ。

こうした祖父の後押しが利いた。初めて土俵に立った秋場所の前相撲は3勝3敗五分の成績で終わったが、翌30年初場所、序ノ口番付に初めて名前が載った初場所を「引き続き様子を見よう」と家族は決めた。この場所、剛は黒星発進したが、その後、快進撃6連勝を飾った。そして蔵人が行動に出た。

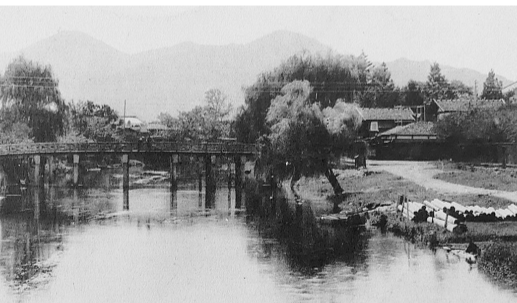
元は倉沢の旅館だった

○：柏戸の実家は旧朝日村倉沢の旅館を買い取ったものだった。大鳥鉾山関係の客を対象にしていたが、これを畳むという話を聞きつけた。直線距離にして18キロあったが建物を解体、材木を大鳥川、赤川、内川と

大正10年の鶴岡大洪水後、市内下着町(現本町二丁目)はまだ水が残っている



景観を誇った三雪橋も流された



毎週火曜日付に掲載

